



秋
の
朝





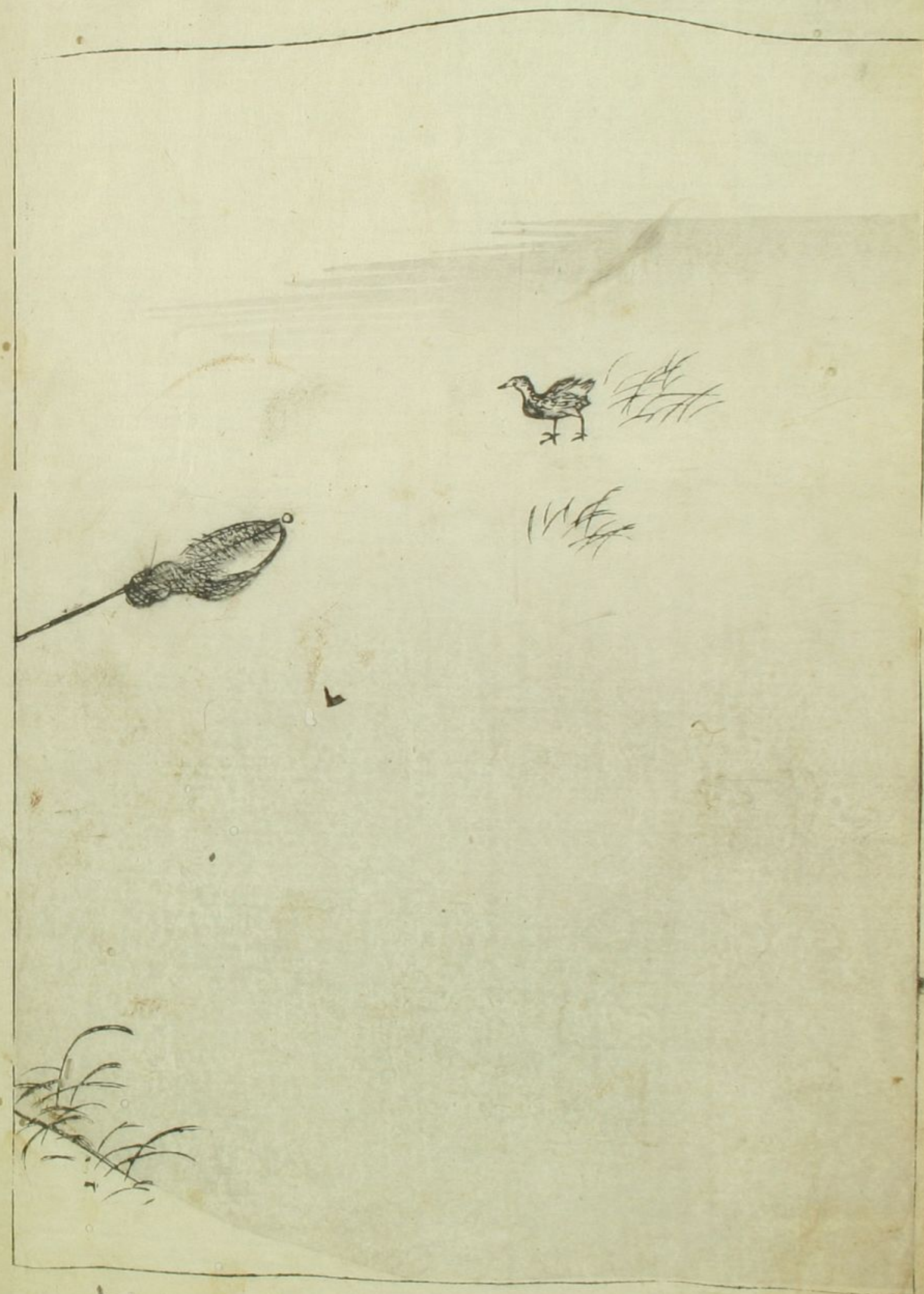


江の光たつらふ来り秋の秋
 今頃の酒はめでたきなり秋好
 起心探る秋の川に身を
 ちのちを秋の成る物忘れ
 初秋の心と起る酒の井
 秋の心と起る酒の井
 照中の秋の苦のちを忘れ
 手強心又ほ秋の樹が
 菅三
 菅三
 素心
 松什
 成美
 里かの
 花度
 菅三

秋の心と起る酒の井
 照中の秋の苦のちを忘れ
 手強心又ほ秋の樹が
 菅三
 菅三
 素心
 松什
 成美
 里かの
 花度
 菅三

秋好風

秋の心と起る酒の井
 照中の秋の苦のちを忘れ
 手強心又ほ秋の樹が
 菅三
 菅三
 素心
 松什
 成美
 里かの
 花度
 菅三



鳴突

下総の園萩原^{ヲキダラ}遠原中ハ鴨のおり居了^{ウツ}動^{ウツ}くす
何るを七八間^{ハタチ}隔^{サラ}々竿^{サラ}羅^{アミ}を鴨の正面に向き^{フカ}け
を付る^{フカ}ら^{フカ}く^{フカ}る^{フカ}り^{フカ}くと^{フカ}廻^{フカ}り^{フカ}家^{フカ}初^{フカ}ハ大^{フカ}輪^{フカ}と
廻^{フカ}り^{フカ}隨^{フカ}て^{フカ}追^{フカ}寄^{フカ}ま^{フカ}み^{フカ}小^{フカ}輪^{フカ}に^{フカ}巡^{フカ}り^{フカ}て^{フカ}止^{フカ}こ^{フカ}六^{フカ}七^{フカ}尺^{フカ}
又^{フカ}近^{フカ}く^{フカ}成^{フカ}て^{フカ}か^{フカ}の^{フカ}竿^{フカ}羅^{フカ}を^{フカ}投^{フカ}け^{フカ}て^{フカ}と^{フカ}る^{フカ}ぬ^{フカ}を^{フカ}
六^{フカ}七^{フカ}尺^{フカ}の^{フカ}所^{フカ}成^{フカ}た^{フカ}る^{フカ}ふ^{フカ}あ^{フカ}や^{フカ}あ^{フカ}ら^{フカ}ぬ^{フカ}羅^{フカ}を^{フカ}か^{フカ}
ら^{フカ}せ^{フカ}て^{フカ}取^{フカ}る^{フカ}手^{フカ}練^{フカ}の^{フカ}こ^{フカ}が^{フカ}なり^{フカ}
鴨^{フカ}の^{フカ}あ^{フカ}ら^{フカ}と^{フカ}て^{フカ}眠^{フカ}る^{フカ}こ^{フカ}と^{フカ}居^{フカ}る^{フカ}是^{フカ}を^{フカ}鴨^{フカ}の^{フカ}看^{フカ}
勤^{フカ}と^{フカ}い^{フカ}く^{フカ}る^{フカ}なり^{フカ}
山^{フカ}城^{フカ}の^{フカ}鳥^{フカ}羽^{フカ}遠^{フカ}多^{フカ}く^{フカ}と^{フカ}聞^{フカ}り^{フカ}

廿番

天 魂 糸

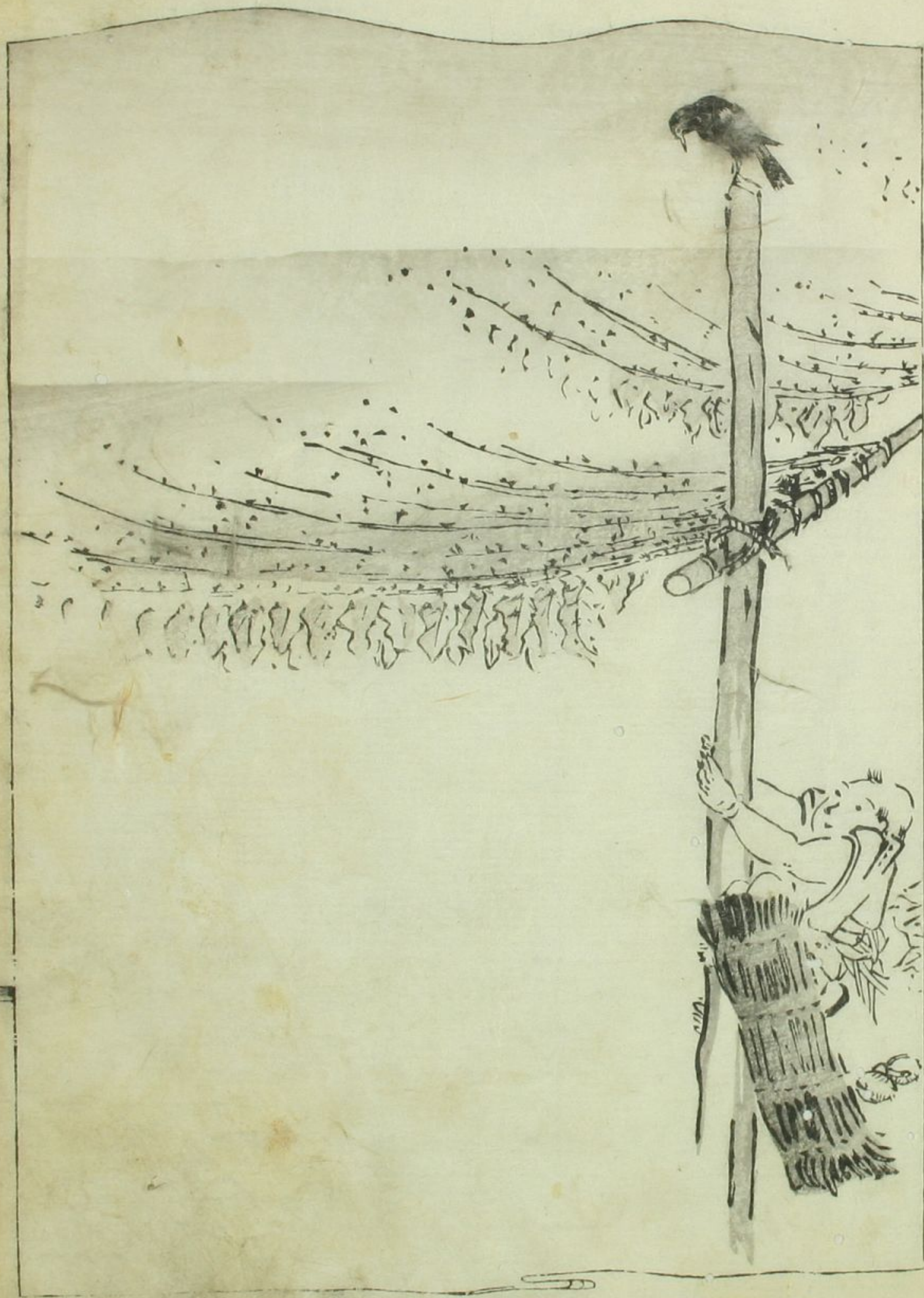
近^{フカ}火^{フカ}子^{フカ}持^{フカ}た^{フカ}ぬ^{フカ}聲^{フカ}の^{フカ}廿^{フカ}り^{フカ}色^{フカ}見^{フカ}
姑^{フカ}の^{フカ}成^{フカ}算^{フカ}へ^{フカ}て^{フカ}あ^{フカ}ら^{フカ}魂^{フカ}糸^{フカ}と^{フカ}り^{フカ}星^{フカ}
三^{フカ}息^{フカ}棚^{フカ}世^{フカ}遠^{フカ}く^{フカ}て^{フカ}ら^{フカ}わ^{フカ}ら^{フカ}ぬ^{フカ}か^{フカ}
染^{フカ}布^{フカ}の^{フカ}あ^{フカ}ら^{フカ}い^{フカ}る^{フカ}子^{フカ}は^{フカ}是^{フカ}の^{フカ}盆^{フカ}供^{フカ}が^{フカ}
生^{フカ}る^{フカ}の^{フカ}や^{フカ}ら^{フカ}ぬ^{フカ}形^{フカ}の^{フカ}か^{フカ}子^{フカ}が^{フカ}
露^{フカ}曉^{フカ}
作^{フカ}不^{フカ}知^{フカ}
山^{フカ}骨^{フカ}
近^{フカ}流^{フカ}
梅^{フカ}令^{フカ}

魂棚の淋りたるにかさる海	青心
よささ白のあましく鬼祭	茶静
生草の物外一物喰ふゆふ	小大
鬼棚の葉肉をさる竹鞋履	茶静
係初みたるぬり手や鬼祭	梅令
傾城や扇の上よ意より	酒一
何ささるぬりより鬼祭	玄子

願ふ程はく信まぬ鬼祭 酒一

右 丁申

露のうきよき山雲のあまを	道長
白雲のくほりまの各なり	茶静
忘るる味解ぬより茶静	茶白
洪きの如きくはる茶静	碓岩
庵をまき煮の味く物り	乃春



煙草作

上州甘樂郡 館村タテより出るを館の奉場タテといふ

此辺十里四方より他より出ても此後名館といふ

ふらふらなり

春の彼岸ヒト頃に種を蒔き苗床コシラ拵方凡茄子苗の

床小田一

貝割のほ丈二三寸ふわりて畑へ移し植る

此貝割の頃より切蛆キズとて黒き虫土中に居ると

根を喰切事あり其時其跡く代り根

植足すといふ

古集ふ切蛆の喰たふらむる植畑事

あやうきを酒の糟カスにホシカ鰯を用也

葉をかき土用あけたりを血漬迄をまじりて

上の葉を天葉といふ甘下天葉下といふ持の

下を中葉下中葉下その下土葉上それ

下土葉と順より名あり葉を揉トて土間

多し茹茹をとりて並事二夜ぬきお社

福ささくといふ

古集ふ 秋風や二番煙草の福さを時

そをとり 繩ナハをハサ挟ホて干け其仕様圖の如く

凡抗クヒを二階程つゝ間を並く建てる挿し

是より繩スダ三四十筋ほど引張掛るなり雨天の

時の繩を十疋を程づ、押寄て管をうけまゝ
凡天等十日ほども干又地乾とて土間おならべ
二日ほども干すなり
又夫より家の中に鉤置て農業の暇雨の日
或ハ夜まじに家内打あて葉をのきこ
種を採らる一反の中五六本生立をを其ま
まてとるなり此種熱細束をるものあり
同國沼田畑等と移り一類あり利根郡沼田の
城下南在一帯が本場といふ種類館と異な
り莖太く葉形大きく一尺七八寸中みち式尺あま
なるも有り最良とて色美事なり

干ものハ鼓の場不と遠い處方に杭を二本
建てばよりふ煙草を挟こし繩を引張
てシコロ干ふかきるなり高さは丈七八尺もあり
又家の外廻り庭下へ繩ふたさみ五六尺
おもほしく干もの繩の長さ取扱より
便利なる根おき丈くらあつたり
此烟草の一能を濡手ふて捨るこゝとも火の
付るおなり也急み東海り濱方漁師は妻
是を吞料ふまゝなり
又中甲急み田家みま田植煙竹と稱す
梅雨中専用

又海和ふ多く香るも口中の何さるる物
 秩父^{ツバ}烟草と稱す武呂秩父郡小栗村と云
 解を本場と云一郡押入と云秩父煙草と
 味は館^{タテ}より小一等強^{ツヨク}く自むのうるはし
 事他^ルに類^ルあり

廿一書

尾 古草

お撲場やちんちん	一茶
押きつるや	徐全
角力足子天	日人
あつと角力	茶芽
おあつと	茶静

勝角力人子押さるる候

西馬

乃 なる

痛子ゆきゆきゆきゆきゆき

蟻兄

痛子のゆきゆきゆきゆきゆき

菊三

見人からし一組ゆきゆきゆき

吳亮

遠方のゆきゆきゆきゆきゆき

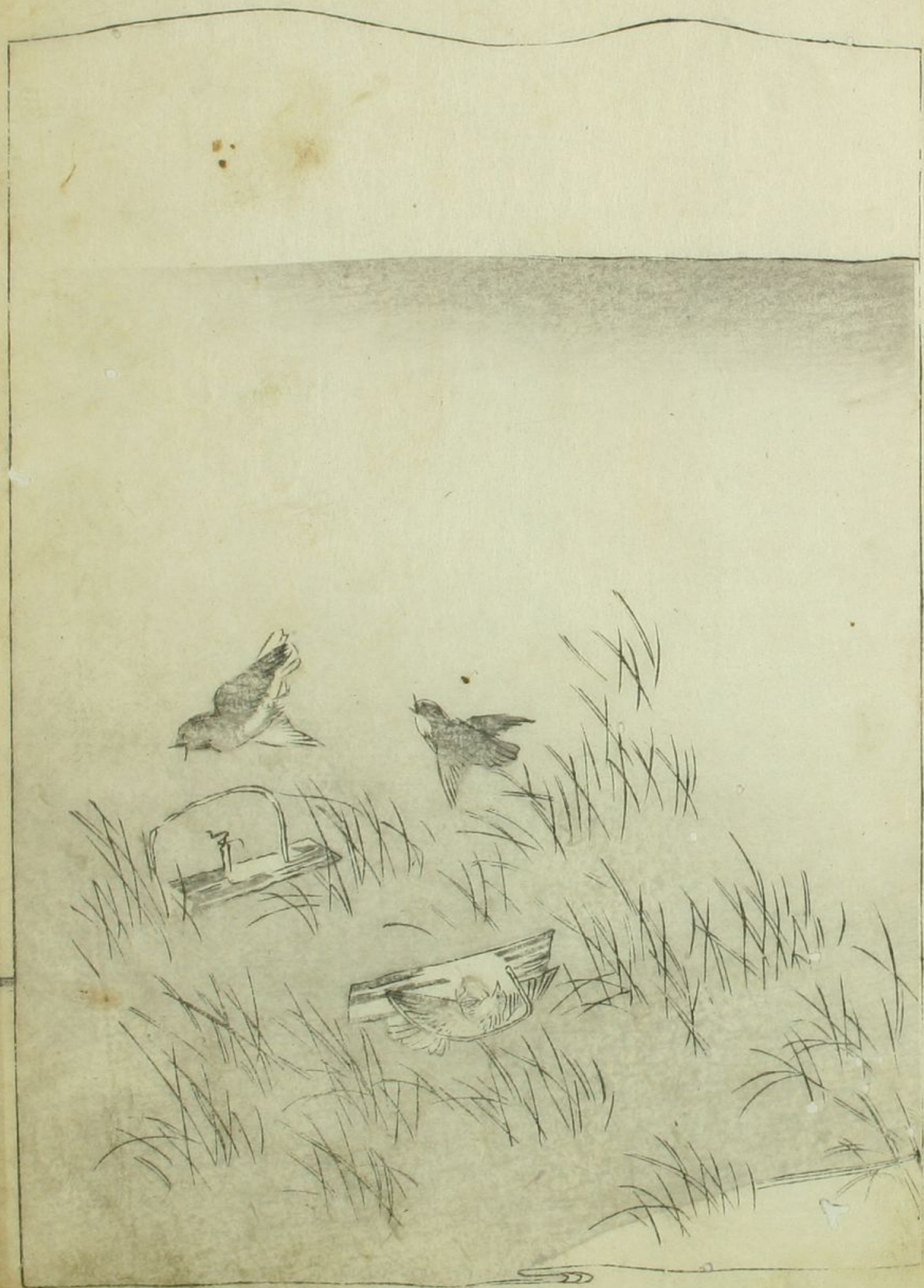
抱儀

秋の夜ゆきゆきゆきゆきゆき

丁知

秋の夜ゆきゆきゆきゆきゆき

恭静



轉取

武州の西上り道より轉ツグミを取らるる多し
獲ハクたる物ありて其の法も獲の餌エに
生イキくる物を馬の尾より轉ツグき置たり
新ウシく申えにわたりて獲風は流るる
とけりて捕らるる物宜高き飛えり
地み付て飛申えたり

廿二番

九 砧

打多しや砧の音も繁り	前	茶
燕種ありて取回し	砧の形	碩布
急のうきも採りておろ	砧の	成美
衣掛しるは回者も	軒り	福州
隣より人をよめり	止	素志
海ありて又も通	衣掛	雲潭
一所より	転	石 <small>作者</small> 知
神遊も	申	小夜
	砧	梅令

下りあはれハ初まぬ禁の碓が
遠くわづねのわづね碓が
笑はる

右 雁

早鳥を競うも 雁はしと急
初雁の山田見は遠し 騒が
そり合はたむけ鳴くはる雁
初雁也 嬉しき 静を 持く
九果
鳳朗
多々
由誓

おもて道ありしを 渡り 雁
鳳朗

鳳朗老所四圍引我の宿屋か
鮫洲おとす 迎ふ 行々

おとすも 大羽をむや 渡り 雁
暮れ雁我より 江流 渡り
雁鳴く 舟に 羽を 新く
あはれ 舟に 雁を 舟に
来れり 雁を 舟に 舟に
茶静
樽堂
茶山
一茶
梅令





又さきまの竹の跡は海鳥
 行々々々河魚の跡は海鳥
 降る土の宮の女は海鳥
 後石の跡は海鳥
 海鳥の跡は海鳥

鳥夢
 茶静
 作高
 不知
 素妙
 鶴年

白

碓スル白ス竹タカ輪カを上白くハツ下白くハツをらめりけ

其輪の中へ松の木を大割を折込造りて所へ

小割を打込造りて是れ大さ径二尺位第一子

丈夫少く多く挽ヒキるより比ヒキる物なり一は白

千俵タラ挽ヒキるのみ

碓スル白スに槻キの丸木を以作るあり大さきと云

寸位三四十年の前まゝ是れは白の西

照ワキく繩ナハを付一人を挽ヒキぬといふなり

小西足より踏張フミおきて左右の手あつて

繩ナハを拵ヒキたむちがひに挽用ヒキひ事なり今

大く止あり

又尺二三寸をらめり方ナカい小く目メの立方カも

をらむり碓スルを廻ヒキるを筑キみ中へ是木田の

粘ネ填ツチを後大く粘ネ子コを所トコロを控カの堅カタ木キを

打ヒて目メを立タて此土チを粘ネり碓スルバ水ミヅの中へ

苦ニカ境シホを二割ニ折ヒて交マへて依ヨり

後ノチほそく崩クる事コトなり

水戸の上町スル碓スル白スを某ナニとて是れは職人シヨウジンより

備前モリの圃人ノ家ノ上手ノなり碓スルハ白スを二百石

挽ヒキても目の缺カクる事コトなり

他國タカの白スを五十石も挽ヒキて目減メを以カ用ヨウに

まみり

招の葉木のスルム礎白の方を上品よりワヤ兼ふ

出スルてスルてスルてスルて

練チリツキ埴の軽確の方を下品より兼ふワヤ整ツクる

ある事多しスル聞り

廿四番

左 静 采

何れも思ふおも二日月 大 氣

初月をスルもスルぬスル松のスル整ツクるスル 葛三

堰スルの水流スルもスル初月夜 臥息

待スル月の字スル後スル出スルぬ旅の指 乙二

曾スルたスルてスル出スルるぬ山の上 吳老

初スルまスル出スルぬぬ海スル邊スル鳴スル鳥スル所 卓池

海スルのスル初スルのスル出スルる面スルふし 士朗

月スル初スルしスル行スルぬ高スルを無スルりスル 葛三

橋を渡りし月を袖摺る 宇備
 出る所の風を月 尚心
 芋堀る土の中を清き夜が 善静
 多岐の川に水汲む如き 風郎
 笛を吹く月を懐き給ひ 茶静
 陰の光を月を懐ひ給ひ 浅美
 数多の草花を月を懐ひ 卧鵬
 朝暈一夜見ぬ月を懐ひ 左

月を懐ひ給ひ給ひ給ひ給ひ 月意

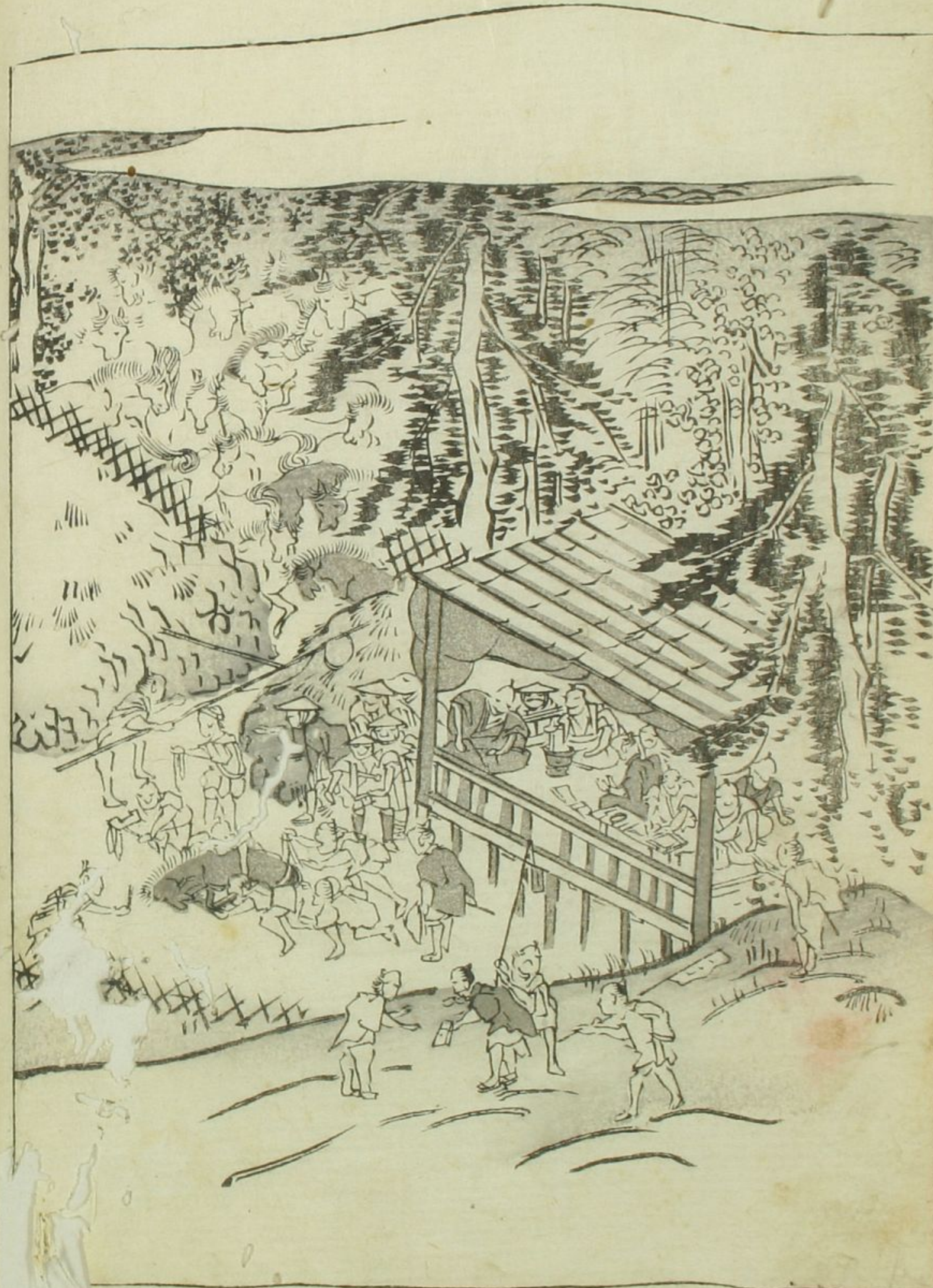
右 名月

名月を懐ひ給ひ給ひ 浅美
 名月の影を懐ひ給ひ 梅合
 名月の影を懐ひ給ひ 全
 名月やあるの命を懐ひ 馬年
 名月やあるの命を懐ひ 茶静

名々火を焚付る中河原一具
 名月お聖心を持し捨人 葛三
 明々や家路道々草花心 全
 明々の小もりの浅め山の奥 又二
 何所そくちかたのまのあつた 沙路
 道々から具々来りて月おるる 菊堂
 さねるはあしき事いふ月とて 葛三
 一婦の草間のあつた月とて 漢豊

月一報おのりて見れ何れ 由誓
 月々曾人いふ事いふ舟 巴井
 海をゆく事いふ事いふ 露泉
 浪をゆく事いふ事いふ 雄洞
 かたまたま来りてあつた月 卓池





野馬取

下徳小金の牧^{ニキ}内高野内野押
野^{ニキ}より春秋両度有り此外おの遠小五六十軒
あり一場所乃廣き大小あまき 縦三里横
五里も何らん前も後より 命ありや物の十
りも前より追まにかり三四日あより八歩人五六
百人又ハ中には廣き野あり七八百人も出堤の上
一丁程の間に四五人マ立居る處を掛原中五ハ
牧士七八十人勢子三百人程あり野馬追立候に
狭き所は方解幅二里の境へ通る何所なる
切きとあるは追まの方へ追まると初日より三里



四方の野へ突如多二のめりて二里れ野へ追入き三日
をたひ一里の野へ集え前日ハ二十宵四方のりよ
場へつ追ひ追ひる南の野のりよ南の方より
牧士物子の者立ならしむの方へ追ひる中野野
の加へあきになく物子ち遠野のりよ追ひ
引追ひ馬数足あり是を追廻し追ひる
あり山川芦原沼あり凸凹ある所を野馬ハ命際
りに逃走するそれを追馳逐つ物子の者を馬の
いら首にひき付追ひる馬を跳ねて追ひ
中に物子を乗馬ふのり走りけり捕ん
とと又ハあきなり野馬の者ハ飛

甚やう物多きこと自存ふ馳馳るなり
そのを裸馬ハ志がみ付まてり
のり廻りよるありありの押決り
出のり古の戦場ハかきあらんやと眼を
しきぐらをり其は追に二十間四方も境を
築立たかみ場へ追ひる馬の数凡三四百
何んあやうなるも場の上ハ機おを
役所より地頭所より出役有り
既役帳面を控へ書留め其境の下を
場の中よりハ牧士三人程野袴より出馬取
十人ほど居り馬溜りより一足是目かけ

あるは追出を人牝牡母子三四匹付添ひ都合
五匹は左らあつて右の役所下へ来る中
小御用母たまご一足を七八人かり追伏せ
口に業書とけ首あり尾へ太繩をあげし
引出すかり馬をまはさすや聖に遊むる六
いなる夏あやありんとも駢オロキ候十三ダを浮
かすも躰オロキのまはさすや曳出は廿二町程
をハ馬一匹に十二三人かりやうオロキま
よりハ終オロキ三四人かり酒オロキ井の驛オロキ牧士の屋敷
より引連送るゝ馬もたゝあまオロキいかなる
あやゆんと物思ふ躰ありり二十町オロキ

内合オロキあまあま三四人オロキ追出
己と急オロキあまあま
御用馬ハ三才かり同オロキ三才ハ末オロキあるき
を腰のあまあま内野あま内野あまオロキ焼オロキ
をまあま放すく四五才あり御用ふるあ
より是を一兩年野ま追もオロキあま
一足目けあまを押しけ外オロキの五才足オロキ野オロキ
あまあまあまあまの木戸をまあま追出まあ
子ハ四五足飛立ちまあまあまあまあま
走りあまあま野の画に野馬の躰オロキを
あまあまあまあまあまあまあまあま

行くそまゝに母を尋ねても更にも
さる由急にかゝる一騎なりしを
牝牡とも野へ返されしを見ても
再々アタヒ行かざる

牧士も馬を見分て何支々大駱りに
とれ掛おの御役人懐かしく凡三百の中六
十足の再調の上御用馬何匹御地頭所
何匹と差出残り何十足程の御拂出
り近郷より置て御用馬なる
馬に至るまでなす物くし中にも
いふ用もまきにもおそくや

三百足を三所母境を隔て百匹の一所
並に馳合ふと更に
此野馬取具物を由し給ふ近所より
男女オヒメ夥しく出群集り諸商人ウラも
おきれ小家を造り軒を並出せし
物の入り高をよる管物とて何れも
用の弁さるやうに持てる如き

廿五番

尾 秋

今嘆く静ふを持常く柳 暮 駢
 是もつ又付くもも秋の雁 眉 山
 戦く皆に花の逐付く小秋如 西 月
 小あれ秋を見くもさの燕の心 素 怨
 嗚りりまかかんり 露 々 何 記 待 雪

産掃やいこり秋女かきり 秋 暮
 鈴 繩 の 端 も 志 け ち 秋 の 心 閑 月
 何れも又けけ程静なり 道 年
 鈴もほくも 端もあり秋の心 茶 静
 然れもちこりも秋の心 戌 美
 絨燭も行あつりも秋の心 年 緒
 花静も花も静も持も 西 馬

右 鹿

薄をく活て鹿行をくらのぬ

千影

行ふぬきぬ一を鹿を鹿

卓池

伸あるやうに鳴りて鹿のく

素架

期るね鹿の鳴るやうに

台

鹿笛を吹く人々来思

生窓

鹿笛を吹く人々来思

東本

鹿笛の吹く人々来思

十景

鹿笛の吹く人々来思

士朗

鹿笛の吹く人々来思

西月

鹿笛の吹く人々来思

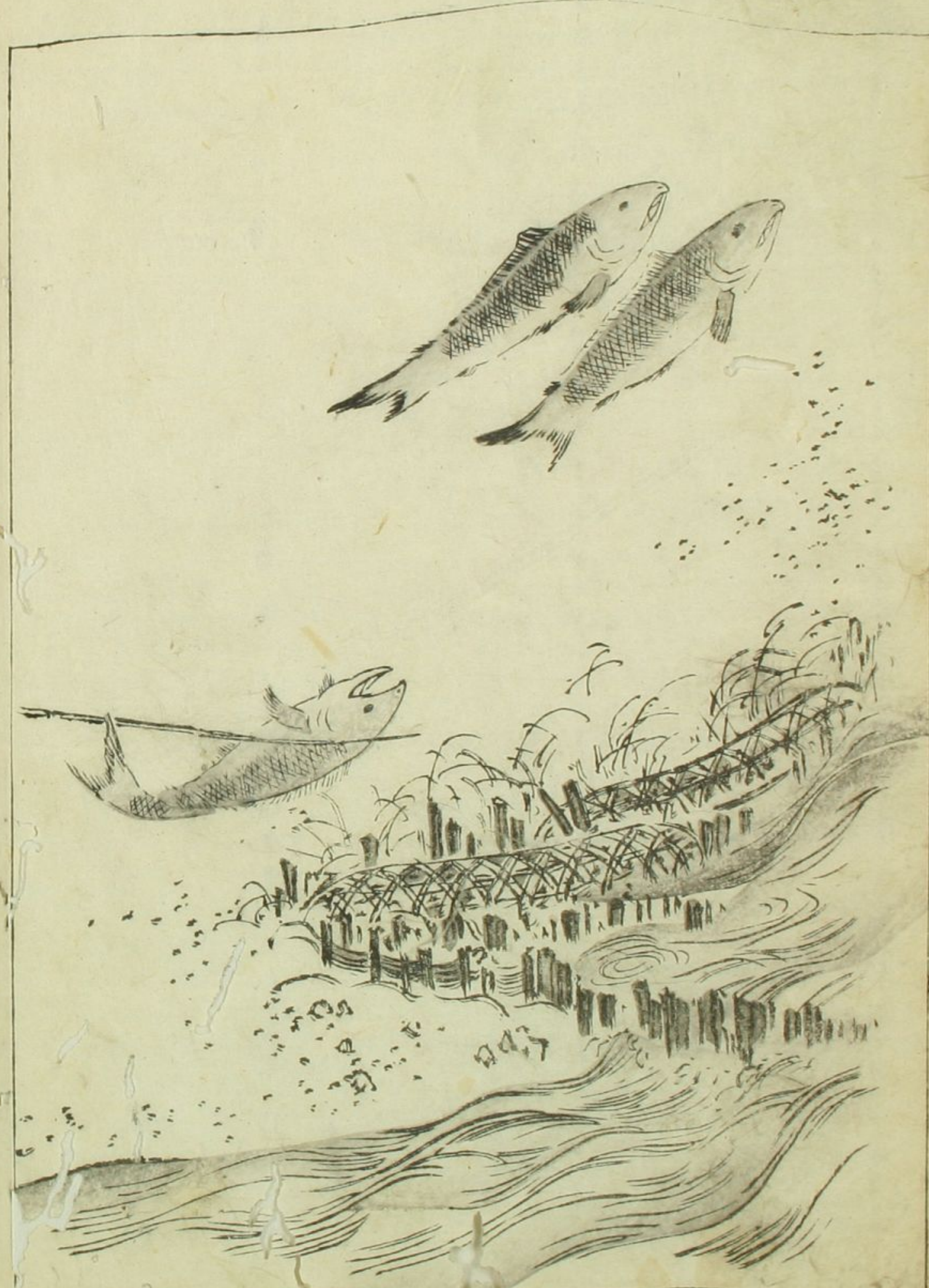
五本

鹿笛の吹く人々来思

五本

鹿笛の吹く人々来思

弄化



鮭打

越後^{エチゴ}の川^{カハ}の曲角^{マカド}へ川^{カハ}を^{タテ}文^チ
小築^{ヤナグヒ}杭^{スギ}を^{スギ}打^チて^チ鮭^{イサナ}の^{イサナ}水中^{ミヅ}を^{イサナ}登^{ノボ}
る^{イサナ}を^{イサナ}登^{ノボ}る^{イサナ}や^{イサナ}に^{イサナ}して^{イサナ}登^{ノボ}る^{イサナ}は^{イサナ}鮭^{イサナ}を^{イサナ}打^チ
み^{イサナ}乗^{ノボ}り^{イサナ}て^{イサナ}砂^{イサナ}原^{イサナ}へ^{イサナ}上^{ノボ}り^{イサナ}砂^{イサナ}の上^{イサナ}十^{イサナ}間^{イサナ}あ^{イサナ}り^{イサナ}の^{イサナ}所^{イサナ}
を^{イサナ}も^{イサナ}走^{イサナ}り^{イサナ}て^{イサナ}又^{イサナ}川^{イサナ}へ^{イサナ}入^{イサナ}り^{イサナ}と^{イサナ}を^{イサナ}り^{イサナ}漁^{イサナ}文^{イサナ}を^{イサナ}
川^{イサナ}の^{イサナ}端^{イサナ}に^{イサナ}石^{イサナ}を^{イサナ}積^{イサナ}り^{イサナ}て^{イサナ}其^{イサナ}陰^{イサナ}に^{イサナ}
り^{イサナ}長^{イサナ}竿^{イサナ}を^{イサナ}持^{イサナ}て^{イサナ}出^{イサナ}て^{イサナ}鮭^{イサナ}の^{イサナ}砂^{イサナ}原^{イサナ}を^{イサナ}走^{イサナ}
り^{イサナ}て^{イサナ}所^{イサナ}を^{イサナ}打^{イサナ}て^{イサナ}取^{イサナ}り^{イサナ}て^{イサナ}花^{イサナ}
を^{イサナ}打^{イサナ}つ^{イサナ}て^{イサナ}走^{イサナ}る^{イサナ}事^{イサナ}は^{イサナ}少^{イサナ}く^{イサナ}横^{イサナ}
に^{イサナ}走^{イサナ}る^{イサナ}事^{イサナ}は^{イサナ}少^{イサナ}く^{イサナ}横^{イサナ}に^{イサナ}

廿六番

尾 幾久

結^{ムス}あ^{ムス}き^{ムス}て^{ムス}垣^{ムス}を^{ムス}運^{ムス}ぶ^{ムス}菊^{ムス}の^{ムス}志^{ムス} 表^{ムス}外^{ムス}
茶^{ムス}の^{ムス}味^{ムス}は^{ムス}一^{ムス}味^{ムス}と^{ムス}も^{ムス}熱^{ムス}い^{ムス} 素^{ムス}心^{ムス}
物^{ムス}は^{ムス}紅^{ムス}い^{ムス}を^{ムス}り^{ムス}て^{ムス}茶^{ムス}の^{ムス}味^{ムス}は^{ムス}一^{ムス}味^{ムス}と^{ムス}も^{ムス}熱^{ムス}い^{ムス} 月^{ムス}は^{ムス}
一^{ムス}味^{ムス}と^{ムス}も^{ムス}熱^{ムス}い^{ムス} 水^{ムス}は^{ムス}
大^{ムス}茶^{ムス}の^{ムス}味^{ムス}は^{ムス}一^{ムス}味^{ムス}と^{ムス}も^{ムス}熱^{ムス}い^{ムス} 一^{ムス}味^{ムス}と^{ムス}も^{ムス}熱^{ムス}い^{ムス}

孔雀の心も庭のうらみの
 法解らぬのめもろの何れも
 えいせいせいせいせいせいせい
 門違ひもいふ久しうれ
 西吹や海もいふ久しうれ
 まれおめめ後もいふ久し
 是れの手お存お長き山
 作らぬもいふ久しうれ

藤壺
 蝶六
 紀遠
 桂香
 多美
 圭布
 梨川

嘆心く菊の花のうら 九十月 茶静

右 紅葉

我高の紅葉又付 藤壺
 見入る人の唇紅くもいふ久し
 帯もいふ久しうれ 紅葉が
 下谷も紅葉もいふ久しうれ
 螺貝もいふ久しうれ 紅葉哉

葛三
 成美
 宇橋
 縁田
 右節

寸外 丁知 青柳 清屋 楨女 八宗 好春 洪俊	燈の 上 下 葉 を 語 る 竹 の 葉	花 ある 下 葉 を 語 る 竹 の 葉	由 哲
--	---	---	--------

花ある下葉を語る竹の葉 由哲



山石其取
武州秩父山野品足尾峠豆州みどり澤山に
出づ

キツラゲ
木茸取も同く

廿七番

左 せうり

雲を又手出つ何とて問はるん
茶静
夜も明く野霧も朝のう沈く
青壺

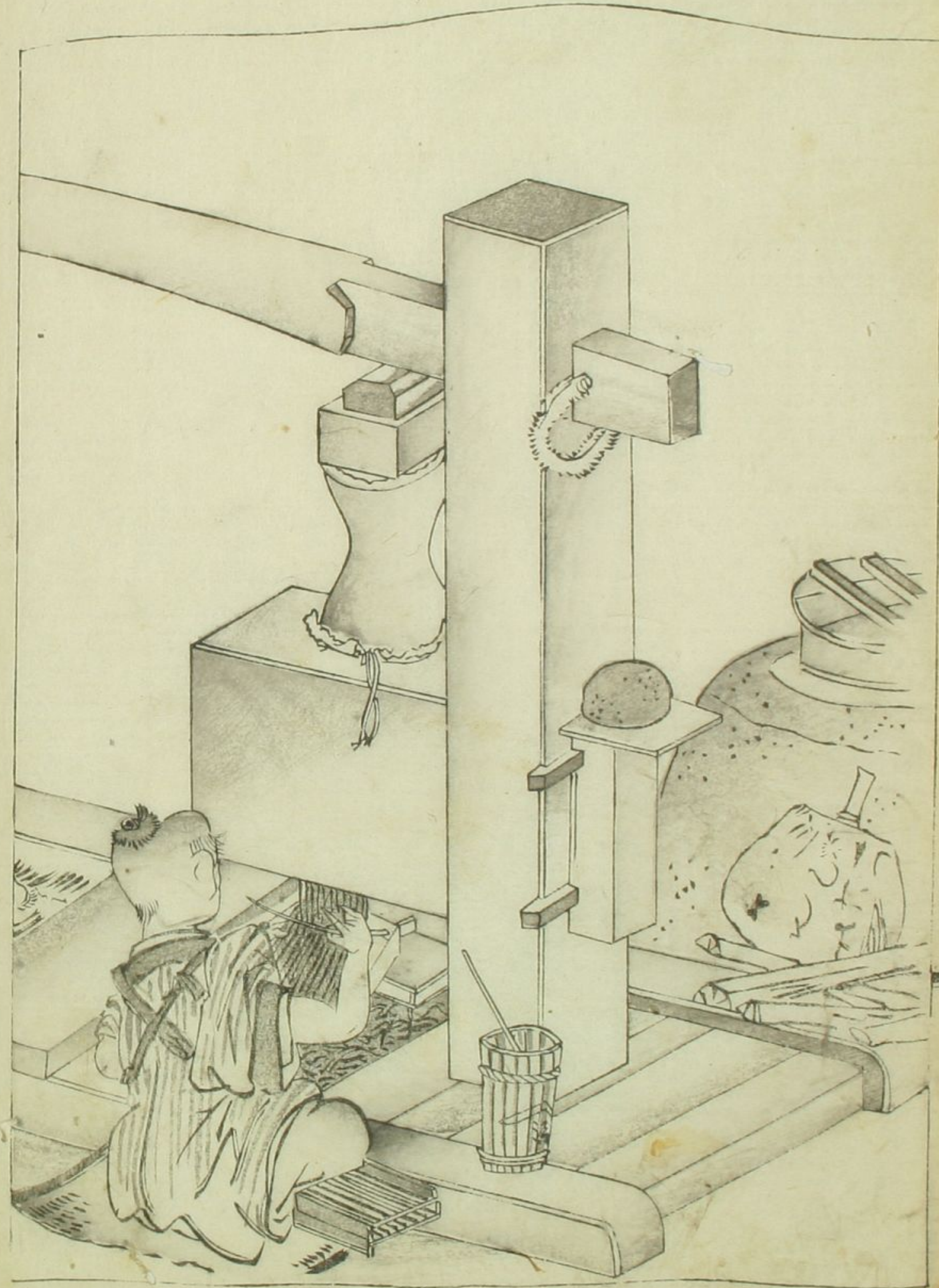
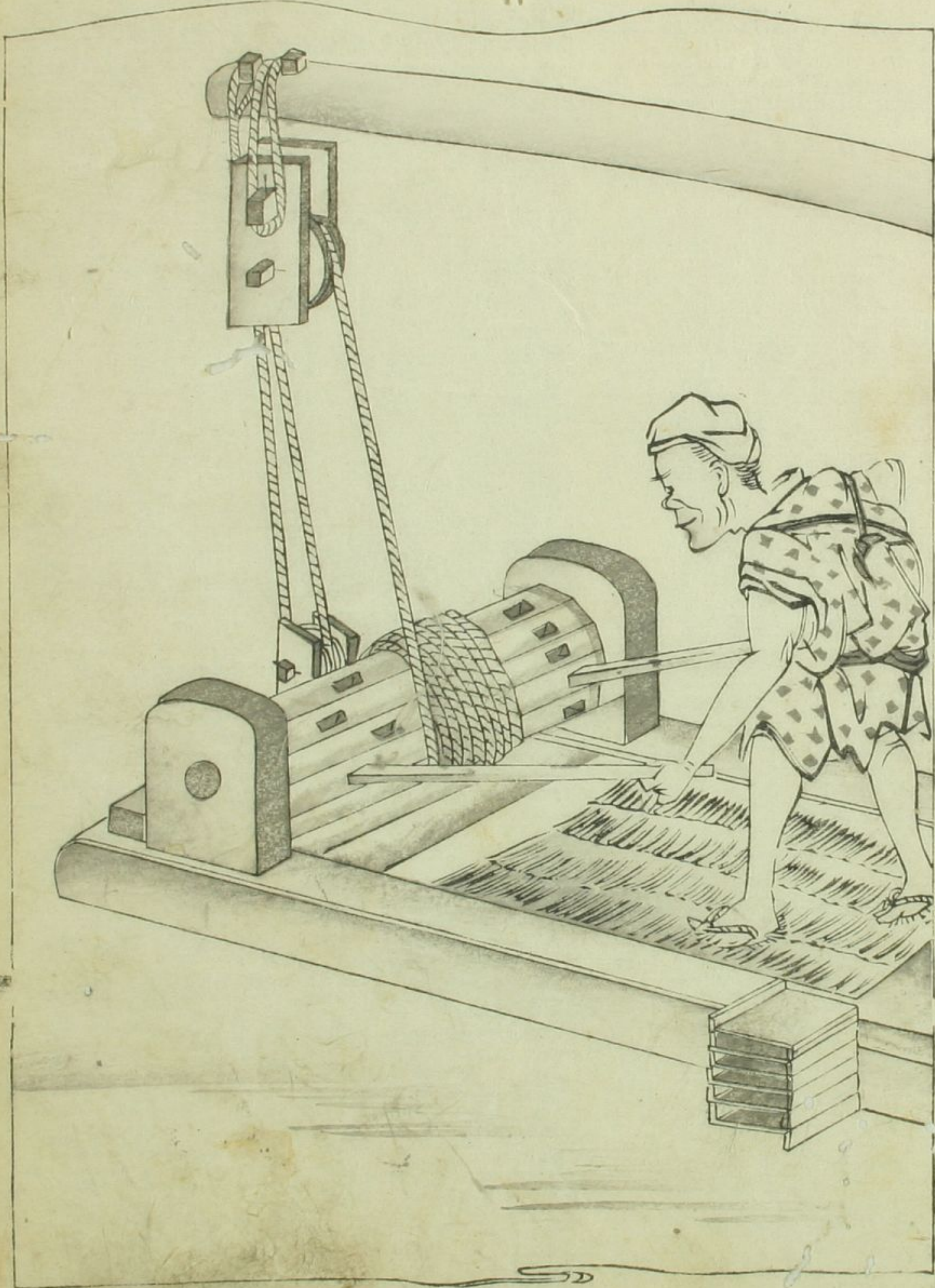
朝霧や出りほつて世なるる
高か
大竹に日影はるき方り雲の
梅令
めらるる汐本林大の裏方中
涼谷
身はるる鐘撞きもやまに中
雪守
秋霧や暗の夜つとけり
士朗

右 秋 暮

内みく問来る人の味も
茶静

秋の暮は接續家に手綱物	全
うら向を旅人來り秋のこれ	蒼虬
昔れ袖を解き挟んで時の暮	一茶
立しほふ失なるをる秋の暮	素直
阿それこれ袖を火に物の暮	道彦
あまの袖を解き一し所聞えり程	葛三

冬の部



線香突

江戸の^{シヨク}本所^ハにあり
香を^コと^ハ焼^ク管^ハの中^ハ入^レ一^方り
重石^ヲを^カくれ^ハ管^ノ底^ヲを^シ線香^{三四十本}つ
垂^ルを^童力^ヲ子^ヲ抱^カえ^テお^ハせ^テお^ハせ^テ
乾^ク極^ク清^クく^もる^事ハ^五寸^{ヨリ}十^三四^寸を
を^モて^手を^出た^らば^やう^なら^ば糸^ヲを^手際^ニへ^テ出^来
せ^しめ^らる

廿八妻

丸 神笛主

寺^ノむ^かの^飛い^よる^神も^おま^りの^一茶
井^ノ端^ニお^しる^神の^住ま^る主^也 申^持
上^京へ^来た^りた^りる^神の^住ま^る主^也 梅^守
十^月に^留ま^る主^也 風^ノ神 露^泉
鞠^ノ門^掃り^神 笛^成

何事も流るる程神速茶静

右十報

畑仕りさるる十夜の手繰が 卓郎

鎮倉より

此の年の谷をきりし十報が 一具

黒髪を照らしし十夜を 八采

何ゆへに揺るる十夜を 茶静

箱の下の音もなす十夜が 葛三

門あけ家も揺るる十報が 月居



狐取

越後より狐雪中に喰物を採んとて軒近く
来りてつゝさやちすゝとて瓢ヒヤゴの頭を採とて切
て中へ食物を入り野中に在る食物をくら
たんとして狐の首は瓢の中へ差理ツおおみ
すゝらゝとゆえゆくとさきと瓢ヒヤゴかぬけざれば
其の中へおを打ちまゝに取たり

廿九番

た時雨

りまあるは旅の時向	樽郎
お降はらん二具の御免	蒼虫
時雨も小舟に疾る朝の風	あめめ
うらまゝ九時雨のかりに	起星
鳥より雨をちりりり時雨か	曉海

少雨の序の葉の影に
 鳳調
 雨の影に竹の影に
 秋岸
 雨の影に馬の影に
 竹有
 雨の影に山の影
 由誓
 旅人の影に燈の影に
 葛三
 残の影に雨の影に
 風外
 吹の影に影の影に
 景支

秋の影に雨の影に
 由誓
 夜の影に影の影に
 蕉雨

右 木 枯

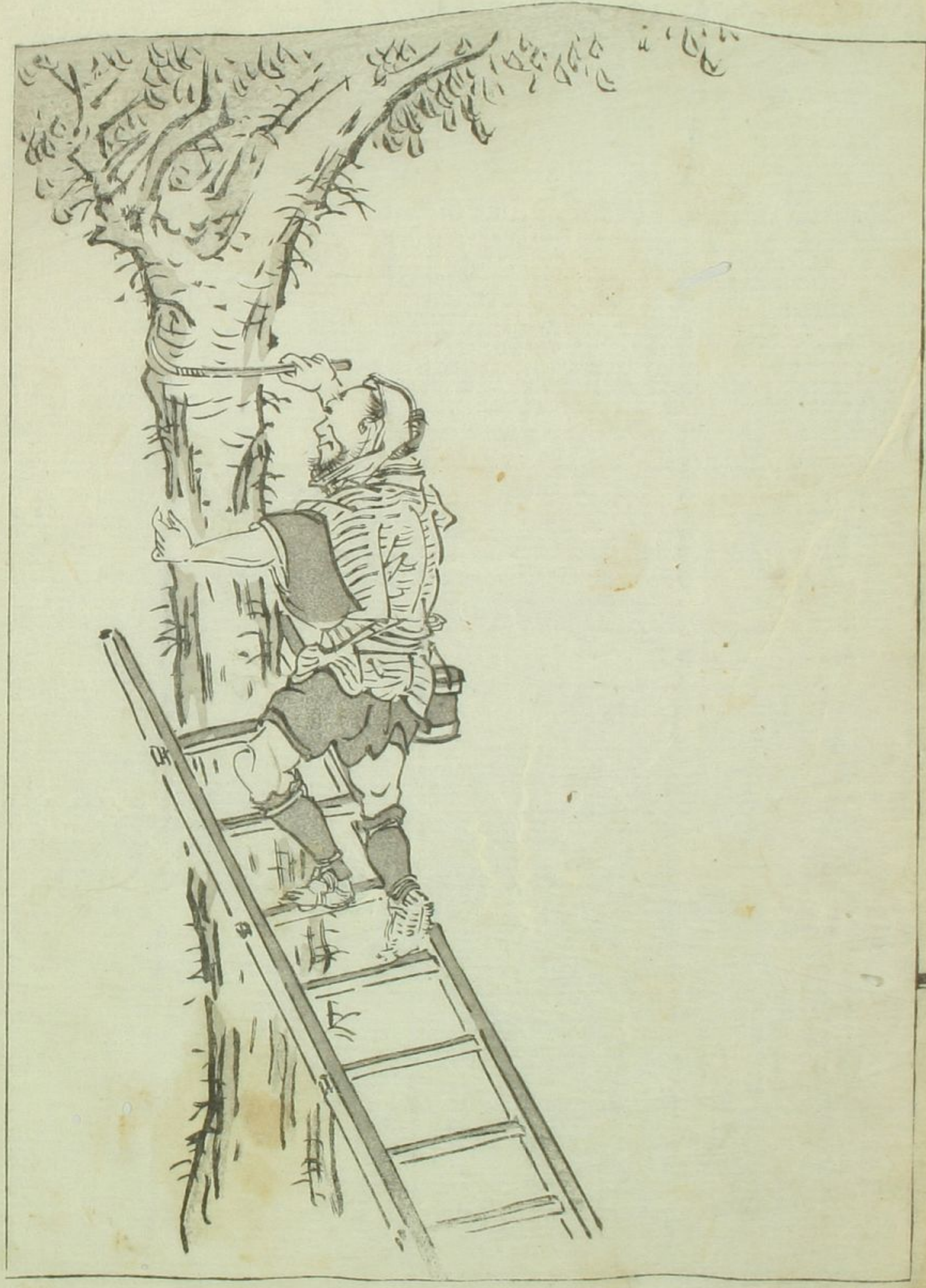
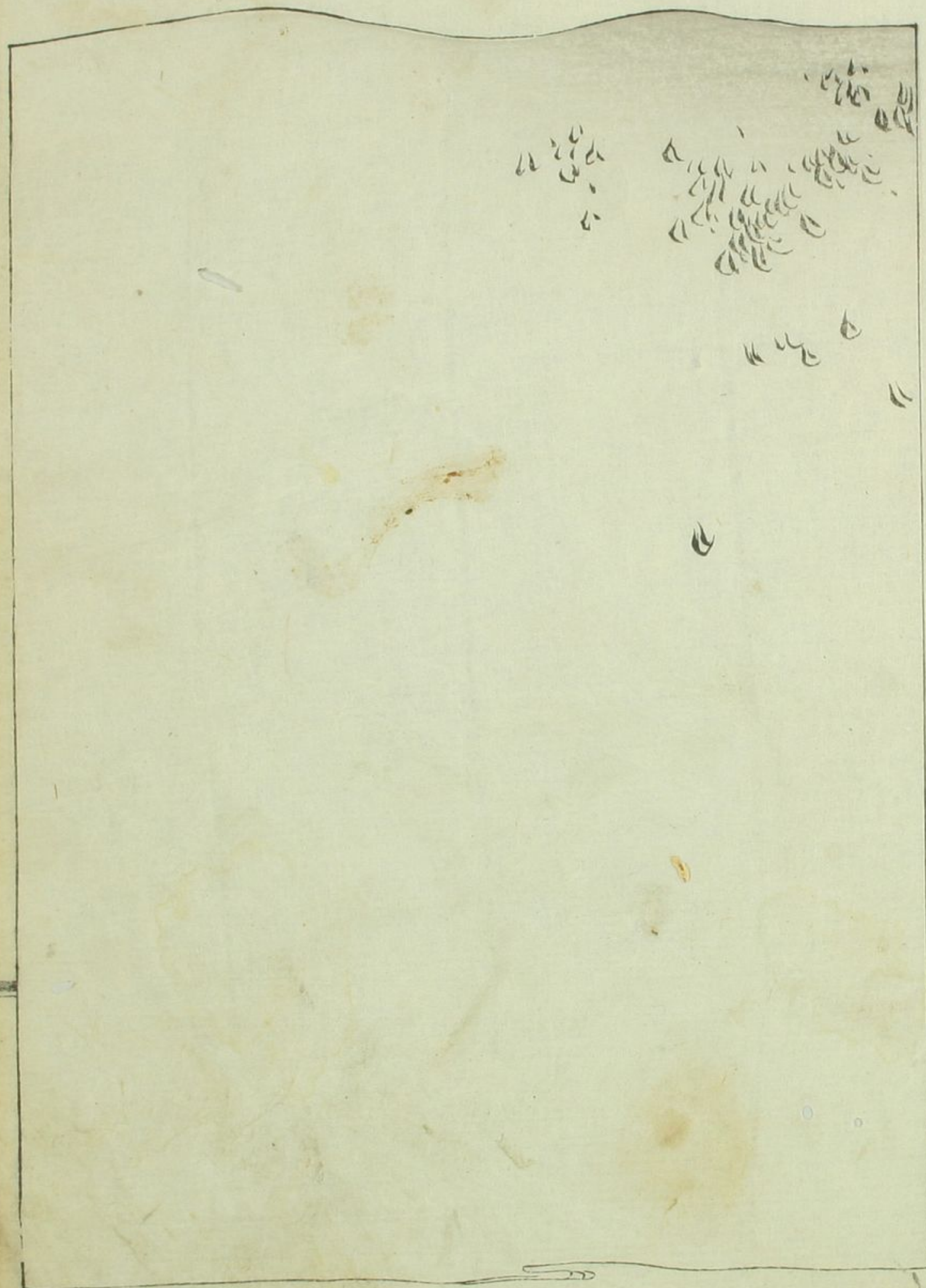
光の影に雨の影に
 碩布
 風影の影に影の影に
 士朗
 影の影に影の影に
 大梅
 木枯の影に影の影に
 為
 津石

風おしほゆる山形
 毎らや風吹く山姥骨
 木枯の終り吹くる物も好く
 吹きつゝ風の空より飛り来
 風の吹く時を待つ花の担
 おしほを連ち何事も何事
 木の根の本の根よあゝの葉が
 吉かきや終るは花の揺る

雀角
 茶静
 月居
 卓堂
 泰静
 悠々
 八木
 梅令

木枯や木枯のよめぬ毎ら
 風の吹く時を待つ花の担
 おしほを連ち何事も何事

杜鰲
 松什
 風外



漂捲

常陸下野丹阿り季寄に夏の部小阿我と
八九月より十一月まで阿り捲人ハ越前に限
と阿り往來に二三十人連立其所へ来りて
各別をて馴染の方へ行阿り
山を買仕切て漂をそるに種々差別あり
事おふれば阿り
但羽州界上充物阿りと云は産の捲人ハ
越後岩船那意多一總々採初るは
半夏のとき候

世為 尾木 葉

尾葉の葉木も物を急ぎせん 一具
山もや葉葉はよ立阿り 一具
さりとて不考の志くはるは諸葉 士朗
諸葉の宮寺めくる都阿り 月居
高葉の日向小急し小僧也 一葉
夕先や葉葉の下を潜る音 壺天
女のふま犬の吼はる人阿 紀遠
あつて阿りし林を阿りし 一具

わさびの味人々も喜ぶ 淡菜の味
小坊主も 風邪のしるし 木葉
角包を牛乳で焼く 散木葉
全 乙こ 成美

右 枯野

春の風も 枯野の
鳴るれ 春の風も 枯野原
枯るて 遠く 吹れ 雨に 春雀子
梅通

焼餅の味も 枯野の
枯野の 味も 人々も 喜ぶ
鮎の皮も 枯野の 味も
旅人も 吹れ 春の 味も
行く 春の 味も 枯野の
晩鐘も 春の 味も 枯野原
枯野 春の 味も 枯野
稲妻の 味も 枯野の 味も
淡史



兔取

出羽より兔を取るに雪中山の上より兔を
追り竹籬タケに投下ナゲり其籬兔より先く
下る我具をもとや叶いぬ予と雪中へ頭カクを
つきあひ尻尾を出して隠る其所を綱を
かぶせて取らんと甘持人の笠を尾花笠と
いふて哉

世一書

左 山花

雪ふるこゝろをなまぬも世一の里

秋岸

腰杖満福さめり

寺へ来りてあまを握る言ふ事

菅乳

寒心のゆきをさしきり力りぬ

鳳郎

古蔓の杭をたぬくもさきぬ

廣徳

雪ふるも世一の人のあまの事

里之安

晴るもあまの事もあまの事

梅令

河沿へても火舟打寒くぬ

茶静

一人之帳面也... 一茶
曾言此... 園
竹也... 茶亭

右 冬 籠

客入來... 素心
兩二日... 由
春... 月

冬... 茶靜
物... 謝堂
寔... 鳳朗
蘇... 駝
夜... 士
表... 南
旅... 西馬



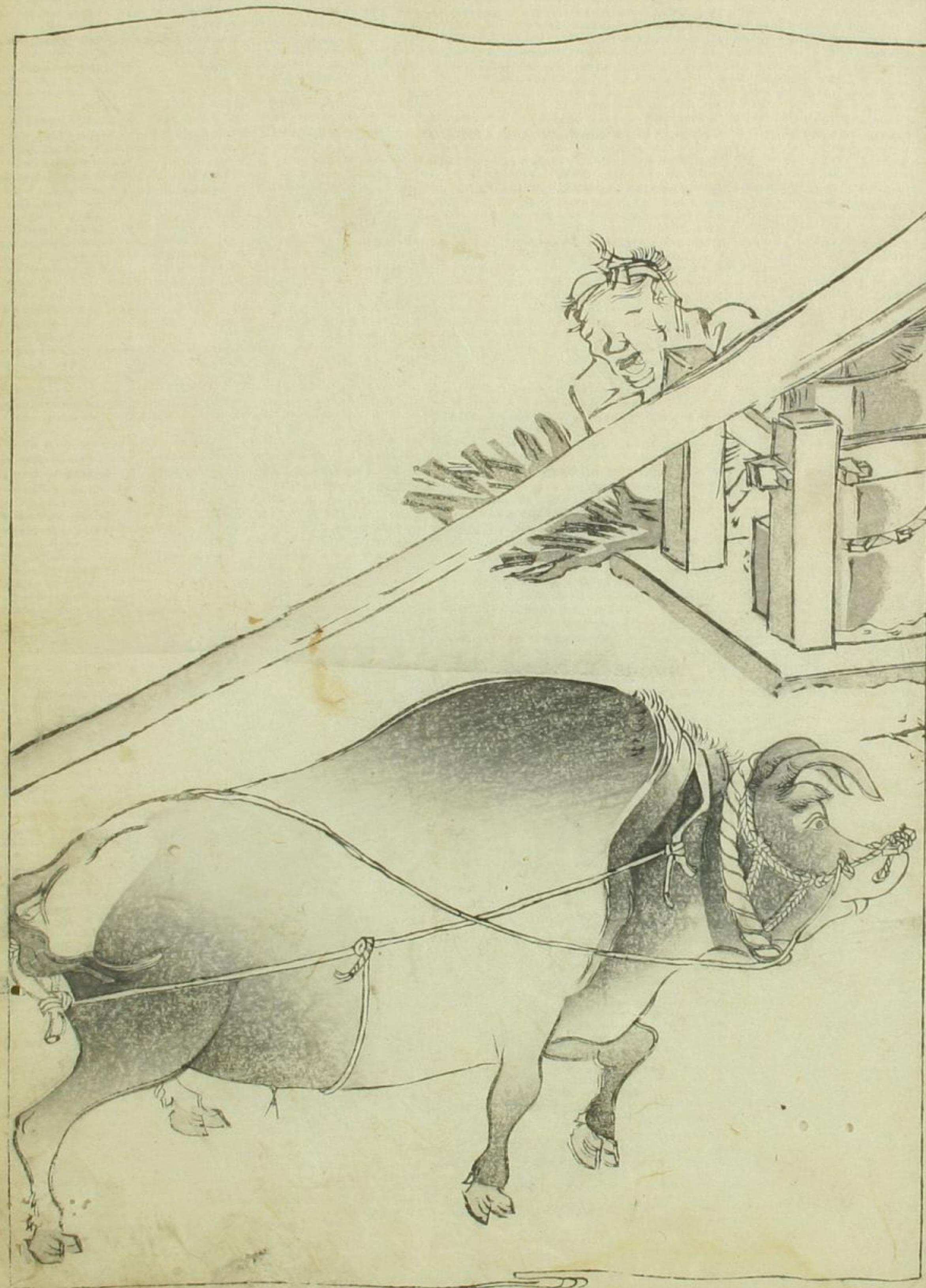
右鳥

新なる成 衡の言と音
かんとと 大空ふなる子鳥が
あつたに ち何れも我友 衡
皆らみの 鳴くこと 相支ふを
吹揺る 聲の同由る 子鳥うる
下る 解立 聲の 衡と 衡と

茶静
心非
泰教
聖孝
文章
八百善

柳寺や 篋の中 みの 鳴 ちる
吹く ちる ちる 衡と 子鳥
何れ ちる ちる ちる 小 相 衡

士朗
山岸居
篇三



砂糖製

駿州江尻在岩原村小絞車ロロの数三四十軒も
有る夜ハツ時より初聖旦九ツ時まで
掛りて牛小引するなるは十月半より十二月
中七十日程の間一日粗み甘蔗カンシヨ二百貫目絞
るを定とせり五十貫目減ハ牛に餅を飼
畑州休をさる又五十貫目絞るハ砂糖汁
五斗五升程出る絞車ロロの成り水ミヅ
き時ハ甘蔗二三本一にたり又絞る車は
ありあり
五張舟兩人居て甘蔗を嚼ク入スせる人ハ



圖のめく土を堆積の中ふ半身を吐き出す
 傍くたうり
 砂粒を製する人を別母ありて右の傍りし
 水を大釜ふ入て製し揚とたり
 甘蔗を作るありて砂まりの地より濱風の吹
 ぶくくくく
 又讃州紀呂も多うり

世之書

尾 巨 燧

年	集	を	友	と	は	る	の	尾	巨	燧	が	多	う
お	と	あ	ら	れ	る	は	ら	る	の	燧	が	多	う
出	る	用	の	燧	は	濁	る	巨	燧	が	多	う	
冷	い	地	り	と	あ	る	は	ら	る	の	燧	が	多
お	の	前	の	推	察	は	何	れ	な	き	か	田	圃
燧	の	燧	は	清	く	く	遠	入	る	の	燧	が	多
り	あ	ら	用	は	何	れ	な	き	か	田	圃	泰	静

大山くまのきりぎりすのこゝろが 一瓢

母のいそぎの習

めくくちまのあつちの積巨達が 茶静

右 蒲園

日女歌のふしをたのまはぬ蒲園が 菓子

唐柑にあつちを思ふ蒲園が 梅令

蒲園夢の家をいひ申すの百屋が 正阿

暖かきあつちをいひ情きぬらんが 祇白

眼のあつちを蒲園いひあつちを探しが 風針

あつちをいひ物さぬあつちを我がが 由誓

月影の通しあつちをいひあつちをが 冬映

音をいひ駒楽の付あつちをいひが 富梅

あつちをいひあつちを蒲園のあつちが 梅令



熊取

奥州南部出羽ホにあり俗言^{ダクゲン}丹ま^{ダク}げと云
者惣身手足とも熊の皮^カに包^ツミ三人連
立^{カラシ}脊^カ小^カ亭^カより作りある角^カゆる炭^{スミ}俵^{タハラ}やう
の物と^{オホ}皮^カより其中へ米味^カ噌^カ梳^カ着^カ靴^カホ^カ代
入^カて上^カ母^カ錫^カをそのせ手に五尺位の鎗^カを^カ持^カ
雪中深山へ入り幾日も居りて穴^カ熊^カを見
出^カし招^{オビキ}引^カ出^カし突^{ツキ}留^{トム}る也
又熊^カと中^カと^カ即^カ体^カを^カ組^カ合^カな^カし遊^カび程
と^カ手^カ所^カあ^カり突^カ留^カるとし^カ此^カ獵^カ師^カの
名^カを^カま^カご^カげ^カと^カい^カふ^カと^カす^カ

世回番

大 初雪

初^カ雪^カれ^カり^カの^カ幸^カな^カ用^カも^カな^カし
嗜^カむ^カを^カい^カふ^カは^カ何^カ雪^カの^カ揚^カり^カ也
起^カ出^カる^カ物^カ手^カに^カ付^カあ^カ雪^カ々^カ然^カ
初^カ雪^カを^カと^カい^カう^カ海^カ々^カ言^カ葉^カの^カ子^カ
馬^カ持^カの^カ名^カ造^カり^カふ^カ雪^カ見^カが
森^カ静^カ

雪の中来たて出あつて雪見うら
 石の機をまゝ申れみあは
 徴されおろし申し聖の年
 何れらんかから雪のう人
 雪此人除へ通へ通へ雪
 申さし人なり雪あつて申なり
 初う降ハあまぬとて雪人
 今降る雪の埋る雪吹来
 白鷗 暮之 茶静 浅美 湖心 鳳郎 东芽 西馬

宿の乃茶好まむ。雪のうら 貞山子
 込あつて風はれぬとて雪吹来 八采
 酒くくまはぬとて涼雪が 多美
 鳴るまゝ雪のうら雪の鳥 湖心
 雪止ぬけを袂の小雪うら 逸閑
 申さし清方に引受て夜の雀 日人
 雪をねの降く泊るおむらぬ 旭洲
 中へのうらぬとて新の雪 石録

雪に音何れも 夜は静かなる
茶静

右 由き

雪の門をくぐりて 秋暮

静けさを我に抱く 尚山

一丁の雪に 幻芝

道子出づ雪に 一北

不変の世に 四人

雪の音も 静かなる

降止る山 静かなる

沿り込め 静かなる

打暁 静かなる

唯の雪も 静かなる

雪のりも 静かなる

在寺も 静かなる

雪の境も 静かなる

茶静

秋暮

尚山

幻芝

一北

四人

静かなる

静かなる

静かなる

静かなる

静かなる

静かなる

静かなる

静かなる



火振

物のおつちを甘らね内に遠國をまゝせん
とく山のふもとに火振なり上方迄所々
あり大坂とて勢品へ知れしとて小信貴山
へ取笠置山へ移し又伊賀州布引山へ
とり夫より勢州青苔山へうつし是成津松
切へ取し是白赤木の櫛を推しとて此を
遠目鏡トホメガキあり見るとるなり夜ハ松明タイミンありとる
とあり
解るハ丸の方へ六度右七度前へ八度深く九度振
時ハ米石月代銀六枚とぬらふと知るべし

ふりまのりては保つ

そ那の火振あり

丸度

廿五番

尾 辨 丸

辨 叩 ぼん あり あり 善 提 あり 可 知 也
末 あり 業 小 達 あり 善 あり 辨 叩 崇 山
何 あり あり 初 あり あり あり 鉢 叩 梅 合

行へぬ先へ書きて紙あり 念々

出あふぬ此の鐘叩 碓中

夢志の夢と見しを夢に 采牙

月文の対の物の別をたす 一具

右 音字下

春負ふたの音の音字の出立 梅令

はるあはれ梅の音の音字下 風接

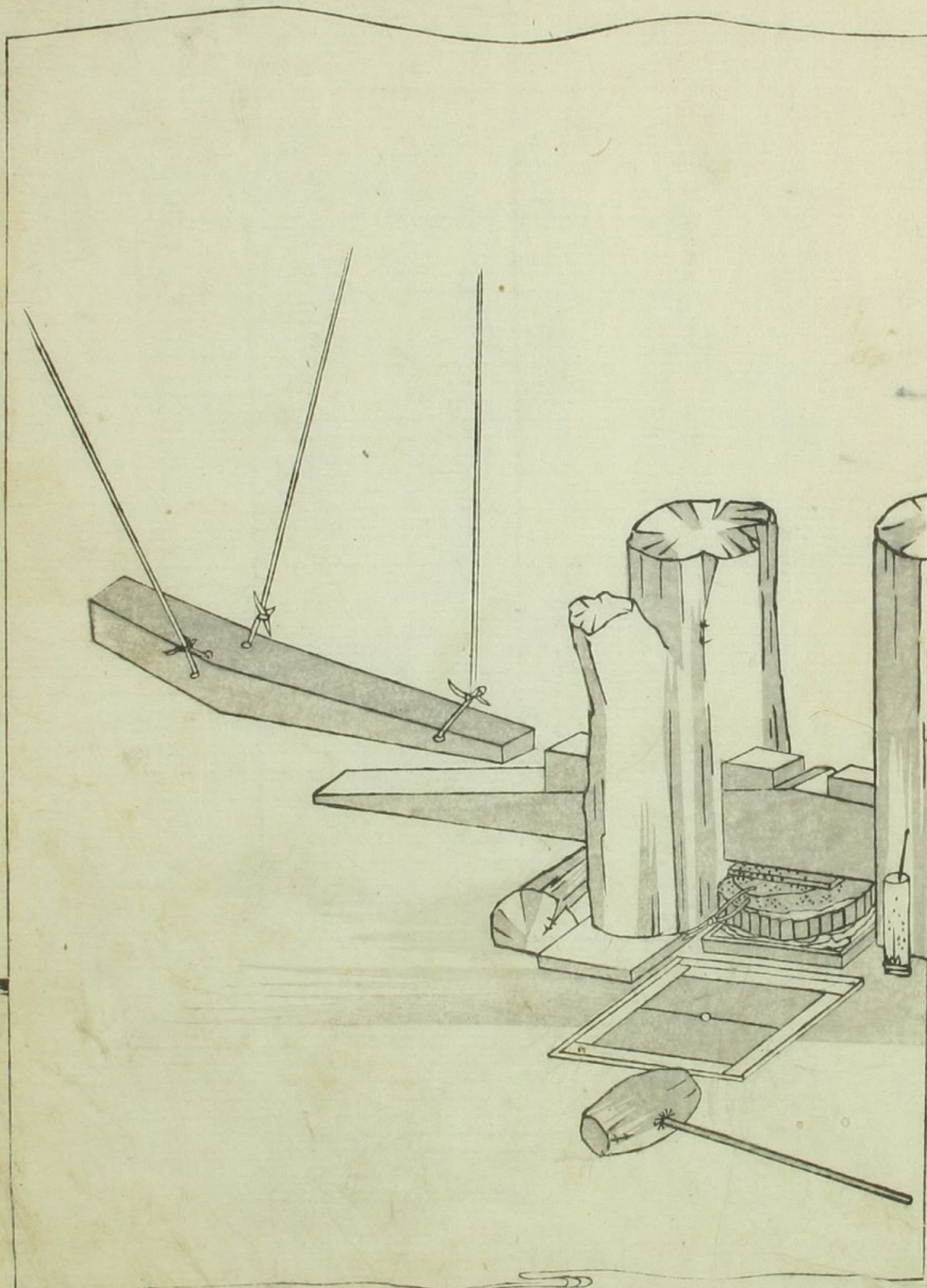
音字の又指へ行く口封 元風

音字の音字の面ありて 鈴巻

音字の音字の足拍子 鳳石

音字の音字の茶静 茶静

音字の音字の風車 一具



油織木打

圃にはありナメ菜種ミホを蒸すイリ後ワ噴管の中へ
入ミきメ木を打ミホて後取り取イリり菜種一石ホクより多
油斗ホク斗或三升とるホクて約木ホク振ホク下細引ホクめ
杵ホクをつりホクて打又振木打ホクい手に杵ホクを振ホクげ
振りながホクうホクうホクのりホクいホクくの事ホクをホクさホクめホクるホク
あホクらホク一ホクとホクるホク

世六番
左 煤 拂

煤	掃	に	濡	る	事	も	多	れ	月	花	川	子
雪	も	延	る	雨	小	さ	る	拂	深	も	子	
煉	取	の	除	端	を	孫	に	効	い	る	茶	静
古	物	や	誰	も	骨	打	形	の	こ	ら	松	海
煤	掃	や	濡	の	必	ず	も	振	の	也	得	燕
古	掃	や	蒸	の	上	に	鳴	あ	る	毎	士	朗
も	も	た	れ	多	犬	の	尻	お	さ	る	茶	静
煤	又	掃	笑	う	こ	れ	を	振	り	と	富	梅

掃くぬき人の集むる葎の縁
乙人
煤掃や鶴遊む向川岸
青臺
すゆゆ湯のぬきぬき一睡り
五木
こゝ掃おるまゝの庭の心時分
黄山

右 平巻

遠まての移りあへし平巻を
乙泉
秘人へて答つるもや年の梅
幽峰

け年のいそがしや梅のあはれ
玄性
眠の念ひも年よる春のうれ
葛三
年れ暮る用もなほし水ぬき
茶静
志ぬ時の静る古にもほし歳ゆき
一具
年の暮るも人の心むか
柳也
年れ暮る火ふあはれもほし
茶静
年情を蕪れまゝに山や端
花川子
大晦日泣きふりて向をき
西馬

大晦日 初のねもむせいのと
茶静
年の尾を著納すのね
梅令

はる柳支おのふ申る人のほし
なほささぬ 雑草事なるを
あゝさす生業よりねのてん
秋乃夜半福あゝぬ喜のりも
念はれぬれいのさすもさす
そいふもさすかほのさす
其道みちをさすのさす

なまぢきねし市街にたむけ
半耕の利得我何ぞむ田家
半田家あり精西辛苦を事
すむ我かみみ知らぬ類
須丘のいれ控保中ぬれ本
目下遠く身にまかぬ事
あはれ我友茶静年とらぬ

山林海濱の人をたむけ
何れもいふ多し物をも
何れも書きも易し物をも
のまを田園ふあはれ
なまぢきねのいふ事
昔白をぬれぬ様ふあ
繪を見ぬ文渡子のあはれ

之難ぬ家と相いり努力を盡す
たれと云ふはと云ふは所詮は
満ちあふ思ふは初學に
ありてはははは狂詠を
之と年日計算の心は
未あまの君親をいかに守り
給ふおのころ天の昔と孝

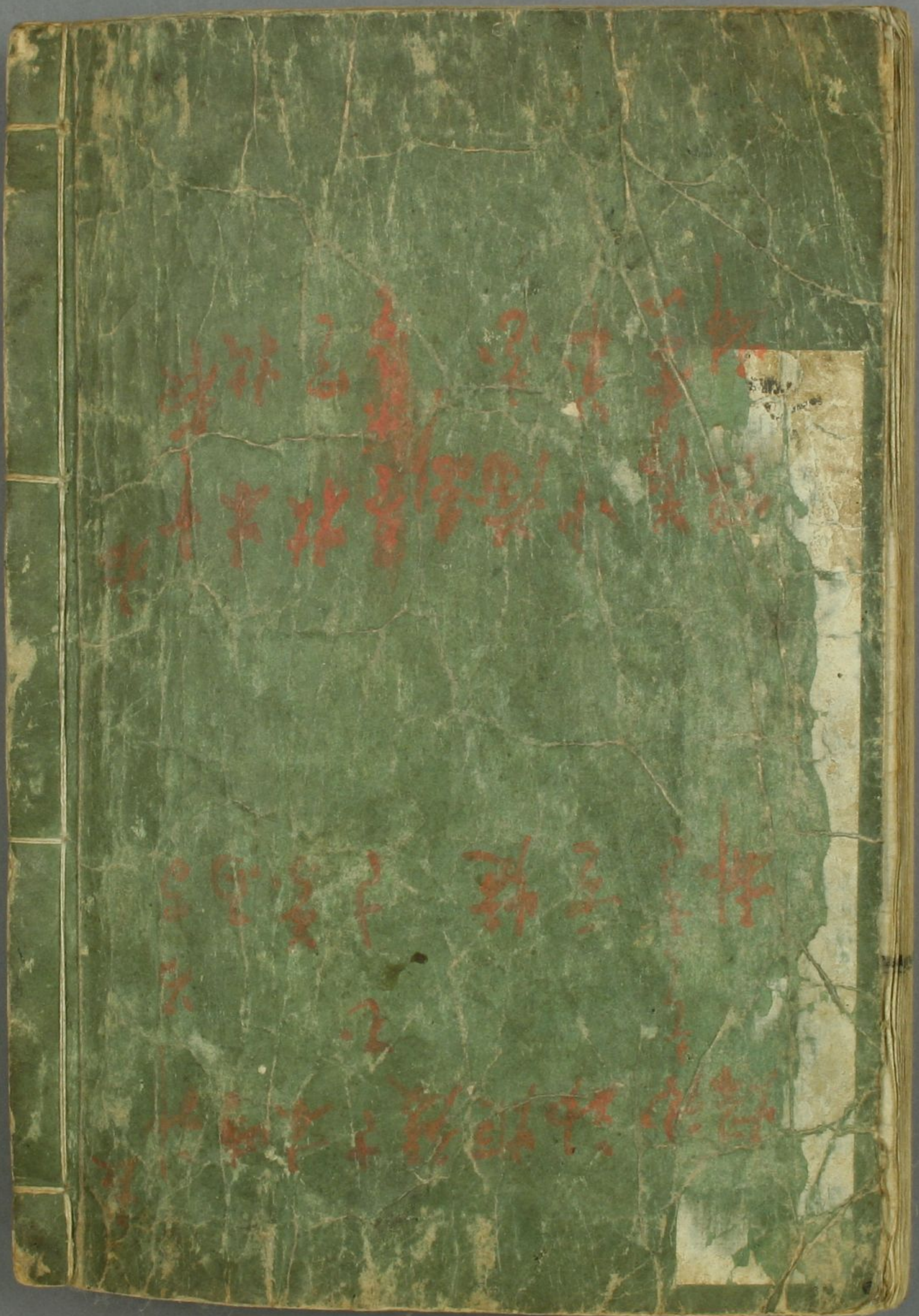
天保七年存母の事
松原數十方の字をとり
ての事と云ふは識の秘傳
名はつるをいふ事と云ふは
の事と云ふは解多寸眼の事
と云ふは名はつる事と云ふは
以て其事と云ふは職に身を

末行風雅之心
亦務其好
其好与文此集
於也其岐に
阿波之李

天保十三年三月

坎富由哲

葦齋正裕書



增補中華書局叢書

卷之五

五 五